

都留文科大学報

Vol.153
December.
2023



特集

公立大学法人都留文科大学IR (Institutional Research) 室の発足にあたって
THMC の近況について —学修者本位の学びを支援する—

夏季休業を利用して学外で学ぶ／教育実習報告
講演会だより／文大だより／ぶんだい堂



公立大学法人都留文科大学 IR (Institutional Research) 室の 発足にあたって

IR 室長 日向 良和



令和5年度より公立大学法人都留文科大学の理事会直下にIR室が設置され活動を開始した。都留文科大学でIR (Institutional Research) を専門におこなうセクションの設置は初めてであり、室長としても手探りの状態で業務を開始しているが、本稿では理想型としての大学IRのあり方やその目的、方向性などについて掲げ、今後の活動の指針としたい。

— IR 室発足の背景

現在は国内の多くの大学にIR室というセクションが設置されている。これらのセクションが設置された背景としては少子高齢化と大学全入時代の厳しい大学間競争がある。日本は2000年以降急速に少子高齢化が進み、18歳人口の減少から大学の学生募集は厳しさを増している。そんな時代背景の中で、大学を選択する際に学生が検討するポイントとして、「その大学では何が学べるのか?」「その学べることは自分の将来の何につながるのか?」ということは受験情報と併せて重要なポイントである。これまでの大学では大学のホームページ等でその大学の研究テーマやゼミの紹介、就職の情報などは公開されてきたが、2つの点で課題があった。まず1つめの点としては大学が発信する情報が「研究テーマ」「ゼミ紹介」「就職先情報」などそれぞれのデータが孤立しており、例えば研究テーマがどんな将来像につながっているかなどセクションを総合した情報の提供などは少なかった。2つめの点としては「～ということを学べます」という情報は多かったが、実際の学生が本当に学べているのか?という点の情報は少な

かった。これらの課題などを背景に、各大学で学生がおこなっている教育研究活動や学生生活、就職実績などの実態を各大学が把握することで、不足する点などの発見につなげていくということが、各大学でIR室が設置される第一の背景となっている。第二の背景として少子高齢化社会を迎えて教育に対する公的資金の導入が少なくなり、支出先が厳しく選択される中で、多少なりとも公的資金が導入されている各大学の活動が実質的なものであるのかという社会の視点が存在する。競争的研究資金の導入と経常的な大学運営交付金の削減は、基礎研究を衰退させるなど現代では批判も見られる方針ではあるが、依然厳しい財政事情の日本国内では重要な社会の視点である。これらの社会の視点に公的資金が投入されている大学はさらされており説明責任を果たす必要性がある。大学でIR室が設置される二つ目の背景としては、この説明責任を果たすための自己点検・内部室保証システムの拡充が求められていることである。

— 教学マネジメント指針と教学 IR

各大学でおこなわれる IR 活動には大学経営における IR 活動と、教育研究活動における IR 活動の 2 つが大きくあると考えている。このうち教育研究活動における IR 活動は「教学 IR」活動と称され、中央教育審議会大学分科会が令和 2 年 1 月 22 日にとりまとめ発信された「教学マネジメント指針」¹⁾ の中でも、「マネジメントを支える基盤」として、FD (Faculty Development)、SD (Staff Development) と並んで教学 IR が示され、「学修成果・教育成果の把握・可視化」と「情報公表」を大学がおこない、それが社会からの信頼と支援につながるとされている。(図 1「教学マネジメント指針」概要より)

教学マネジメント指針での学修成果・教育成果

の把握・可視化および情報公表を行うためには、直接講義などの実施に関わる教務課が持つ情報だけでなく、学生支援課が所管するさまざまな学生生活活動や、各センターの活動、各学科での講義以外での学生生活活動の情報や、キャリアサポートセンターが持つ進路に関する情報など、全学横断的に情報を収集し、集めた情報をさまざまな視点で分析しながら学生の学習活動、大学生活を総合的に把握する必要があるため、IR 室を設置し日常的に教学 IR 活動をおこなっていく必要がある。これから都留文科大学でも IR 室を中心として教学 IR 活動および大学経営における IR 活動を活性化していくことが必要である。



図 1 「教学マネジメント指針」概要

— 大学認証評価と IR 室設置の経緯

都留文科大学は公益財団法人大学基準協会が実施する大学認証評価を継続的に受けており、最新の認証評価は令和2年度におこなわれた大学認証評価である。大学認証評価制度は“国による事前規制を弾力化しつつ、大学等の教育研究の質の担保を図るため、設置後の大学等の組織運営や教育研究活動等の状況を定期的に事後確認する体制を整備する観点から導入されました。評価結果の公表をもって大学等が社会的評価を受けること、また、評価結果を踏まえて大学等が自ら改善を図ることを目的としています。”²⁾とされている。各大学の経営や教育研究活動が各大学の裁量に任されているが、大学の教育研究活動には公的資金が多少なりとも投入されており、おこなわれた教育研究活動を社会に公表することで社会的な評価を受け、その上で自ら改善を図っていくことが認証評価制度の趣旨となっている。大学がそれぞれの教育研究活動を自ら点

検し、改善していくことは大学の自治の上でも重要と考えるが、自己点検では点検の視点などにもどうしても限界があることと、他大学との比較などで自分の大学の教育研究活動を客観視することも重要である。大学外の認証評価機関の認証評価を受けることで、各大学がある程度一般的な基準からみて自分の大学の教育研究活動がどうなっているかを知ることができる。

都留文科大学は令和2年度認証評価結果の総評では次の課題を指摘されている。“しかし、教育情報の公表に不備がある、学習成果の把握・評価にかかる可視化が十分でないなど、改善に向けたフィードバックが十分かつ適切に行われておらず、内部質保証システムの有効性には問題があるといわざるを得ない。”この指摘に対応する方策の一つとして、他大学の例などを参考にしながら令和5年度から IR 室を設置した。

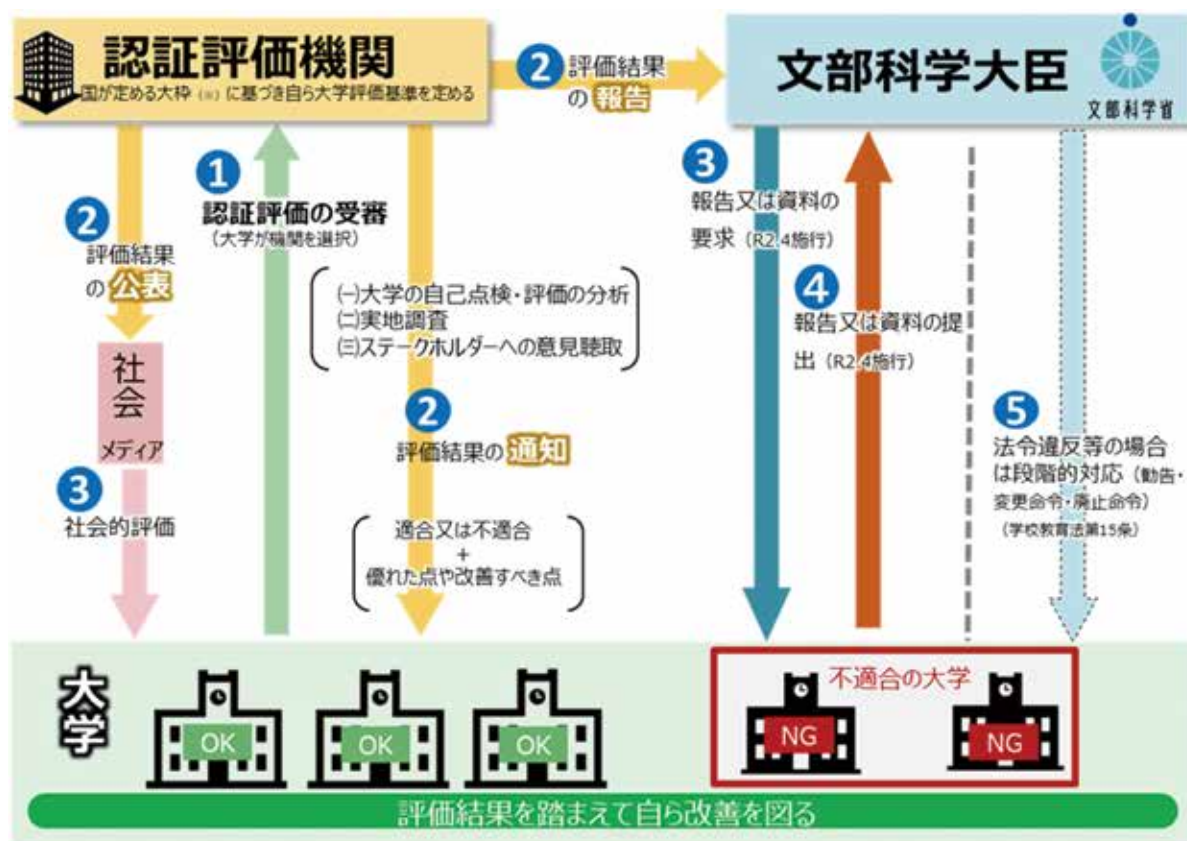
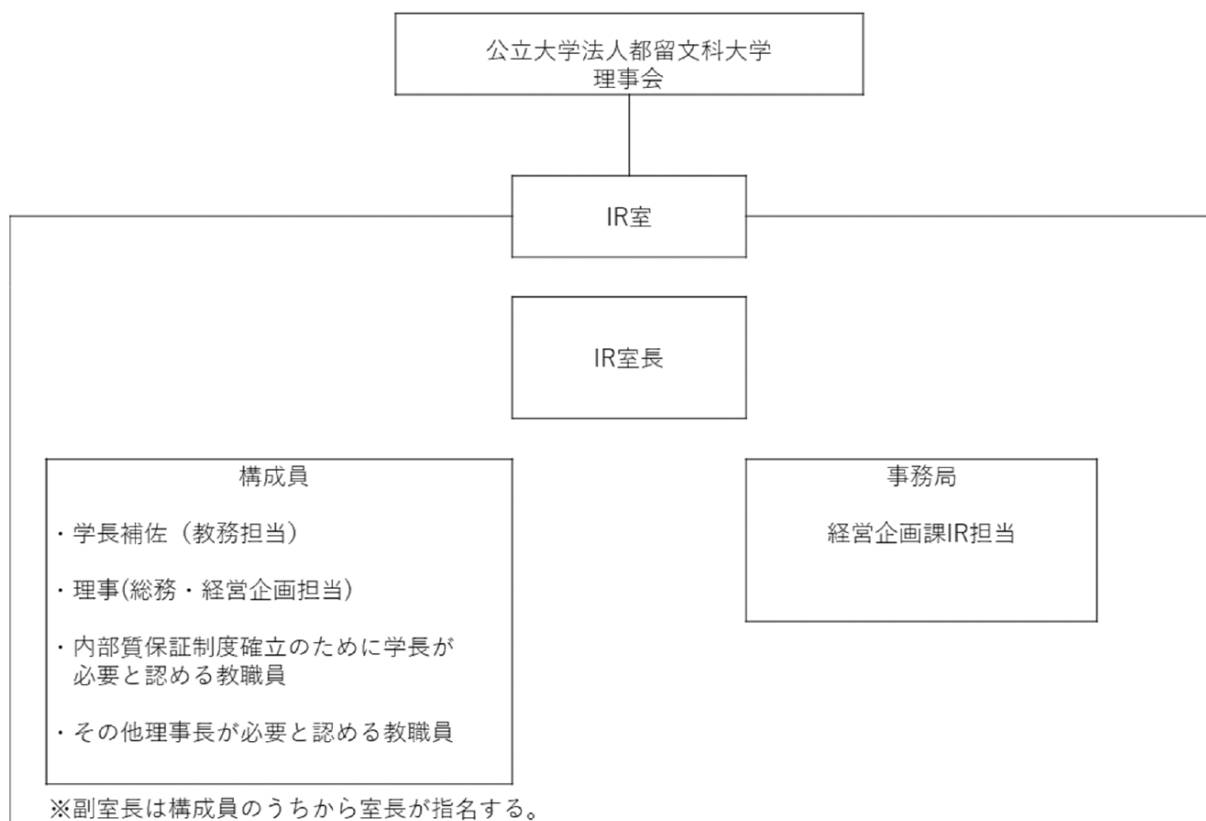


図2 認証評価制度の概要（文部科学省ホームページより）



IR 室の組織体制

— IR 室の主な活動・これから

IR 室は発足したばかりということもあり、現在は各学科、センター、事務局で集めている情報のカタログ作成と、情報収集、分析のためのガイドライン作りを4月からおこなっている。IR 活動では学内のさまざまな情報を分析に利用するため、学生の情報利用への許諾などガイドライン、ルール作りをおこなっていくことが特に重要である。また外部アセスメントテストを初めて実施し、多様

な情報の収集に努めているところである。

今後 IR 室では集めた情報を分析し、大学の学生募集や学生の支援などにつながることを期待される情報を各担当にあげていくことを当面の目標として活動していきたい。その際には全学的な教職員の協力が不可欠であるため、歩き始めた大学 IR 活動にご協力をお願いしたい。

- 1) 中央教育審議会大学分科会「[教学マネジメント指針] 概要」
(https://www.mext.go.jp/content/20200206-mxt_daigakuc03-000004749_003.pdf)
- 2) 文部科学省「認証評価制度」
(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/index_00002.htm)

THMC の近況について

—学修者本位の学びを支援する—

元新棟建設部会長
教職支援センター長・学校教育学科教授 鳥原 正敏



新棟を構想するなかで「自律的かつ主体的な学び」が話題となりました。これを言い換えると「内発的な動機をもとに見返りを求めることなく始めたことを続けた結果、これに意味を感じる」と即ち、我々はどのように「探究を醸成するのか」ということになります。これまで新棟建設部会では「教員がつくり上げたプログラムを一方的押し付けるのではなく、THMC に集まる人々が何をしようとしているのかを観察しながら、どのような支援をすべきか見極めることが重要である」と考えてきました。本稿では、こういった視点から THMC の近況をご報告します。

1. カフェコモンズの様子

後期も始まり、学生さんが大学に戻ってくると同時に、カフェコモンズは大人気の空間となりました。朝7時半ごろから夜9時過ぎまで常に人がいます。特に、授業の合間やお昼休みはほぼ満席で、留学生の姿も見かけるようになりました。利用者に話を聞くと「コンセントがたくさんある、自販機でスナック菓子や食べ物を買えるので助かる、電子レンジや給湯器があるのもありがたい。これから寒くなるのでマイボトルを持参して暖かいお茶やスープなどを飲みたい」とのことでした。狙い通り、カフェコモンズは THMC の中で最も稼働率の高い空間となりました。

2. デジタルコモンズの様子

デジタルコモンズで偶然見かけた H さん（地域社会学科1年生）と S さん（地域の活動団体）にお話を伺いました。「地域活動の準備をしに来ました。デジタルコモンズには作業用の大きなテーブルがあるので助かります。レコードでBGMが聴けるのもよいです。欲を言えば、ペンやマジック、ハサミ、ノリ、大型の定規など、共用の文具があればありがたいです。」また、地域の小学校の先生（本学研究生）が、レーザーカッターを使いこなしながらレザークラフトに没頭、探究する姿も見られました。これに刺激を受けて、レザークラフトやレーザーカッターを使い始める学生さんも現れました。

3. 4階ラーニングコモンズの様子

最上階にある4階のラーニングコモンズは、見晴らしもよく静かで、夜遅くまで人がいます。一方、少し硬い雰囲気もあったので、私から積極的に話しかけつつ「もっと自由に活用してほしい」旨伝えました。同時に、机と椅子の配置を変えてみたり、様々な教具を置いたりしながら、柔らかな雰囲気になるように工夫してみました。すると、徐々に場の雰囲気が変わりはじめ、設置されたホワイトボードを使ってゼミの準備や続きの活動をしたり、外部の研究者と一緒にディスカッションしたりするなどの様子が見られるようになりました。また、学生さんが近隣の高校生の相談に乗ったり、話を聞いたりする様子も見られました。開放性の高い空間を利用して、オープンなゼミ（履修者以外の人が居ても構わない）を行う先生もいます。こういった活動に、既存の教室とは異なる新たな学びの可能性を感じます。

4. 教職支援センター2の様子

THMCで行われている様々な活動の中で、私個人としては、「教職支援センター2」の活動に注目しています。ここには常に、教職に興味がある様々な学生が集まり、自主ゼミや教員採用試験に向けて自律的に勉強したり、互いの専門性を活かして教え合ったりする姿も見られます。彼らはここで長い時間を過ごすので、勉強だけではなく一緒にお茶を飲んだり、時には掲示板の装飾などの工作をしたりすることもあります。こういった活動を通して、強い信頼関係をつくり

だしながら深め合い、「やってよいこと」と「いけないこと」の線引きを探り、自らルールを共有しようとしています。また、来訪者やラーニングコモンズに来た高校生に気遣いを見せるなど、人として大きく成長していると感じています。彼らにとって「教職支援センター2」は「家」であり THMC は「小さな社会」です。彼らは「LIFE(生き方)」を学ぼうとしているように見えます。これは、アメリカの思想家ジョン・デューイ (1859 ~ 1952 年) の試みた「実験学校 Laboratory School」の思想や、本学の元学長である大田堯先生 (1918 ~ 2018 年) の考えた「生きることは学ぶこと」にも重なり感じています。更に、こういった学びを少し距離を取りながら見守り、支援する教職支援センター2に所属する先生方の考え方にも注目しています。

THMC のオープンから約半年が経ちました。この間、多くの来訪者がありました。また、「教育実践研究会」「つるぶん授業フェス 2023」など、大型の研究活動も行われてきました。今後も更に活用が進むと考えています。夏休み中も人が途絶えることはなく、卒業生や近隣の高校生、中学生の姿も見られました。立地の良さもあり、当初狙った「大学と地域をつなぐエンカウンター」の機能を十分果たしていると思います。

更に、各ラーニングコモンズだけではなく、空き教室を使ってグループミーティングをしたり、教育実習やゼミの課題に取り組んだりする様子も見られます。当初、我々教員同様に学生さんも、新しい建物をどのように使ってよいのか探っているようでしたが、徐々に互いの様子を見ながら、概念としてのルール（あたりまえ）を共有しようとしています。

誰かから一方的に道徳観や倫理観を押し付けられるのではなく、お互いを尊重し合いながら「どのようにすれば、より良くこの場を共有できるのか」といった想いを通わせ、考えることは、変化の激しい時代で求められる重要な力を育むことに繋がります。このように学修者が、これまでの授業やプログラムだけでは学ぶことができなかった、新たな時代で求められる力を身につけようとする姿にも注目しています。夕方になるとロビーやウッドデッキ、ベンチで語り合う様子や、動画を撮影しあう様子も見られました。既に THMC は、彼らにとってなくてはならない居場所になっていると実感しています。

私も、学修者（学生・教員・地域の方々）がどのような学びを求めているのか、今後も注意深く見守りながら、こうした新しい活動の支援について考え続けていきたいと思っています。是非、皆様にも新しい考え方による本学の学びを見て頂きたいです。どうぞ THMC にお立ち寄りください。



4 階コモンズの様子 (視察に訪れた University College Copenhagen の先生方が新井仁ゼミに参加)



教職支援センター2の入り口 (学生さんがつくった看板が目印)



デジタルコモンズで作業をする H さんと S さん



ベンチに集まる学生さん

夏季休業を利用して学外で学ぶ

滋賀高島での漢文学ゼミ合宿



国文学科 4年

高橋 くるみ

漢文学ゼミでは、9月15日から17日にかけて滋賀県高島市でゼミ合宿を行いました。未だに新型コロナウイルスの感染が危ぶまれる中、無事に3年生4年生ともに全員が合宿に参加することができました。琵琶湖沿いの豊かな自然に囲まれた環境で、学年を越えてゼミ生同士で交流し意見を交わしたり、日本陽明学の祖と呼ばれる中江藤樹の足跡を辿ったり貴重な経験ができました。

1日目は京都駅に集合し、高島市へ向かいました。2日目は、学生による研究発表が行われ、ゼミ生同士で研究成果を発表することで、新たな視点から学びを深めることができました。また、夜にはバーベ

キューを行い、楽しい時間を過ごせました。3日目は、高島市にゆかりのある中江藤樹の足跡を辿りました。日本陽明学の祖と呼ばれる中江藤樹は、現在も地元の人に親しまれ、その教えが今も伝えられていました。人には「良知」という美しい心が備わっており、この「良知」を極める「致良知」という教えが印象に残っています。

資料を見るだけではわからないような土地に根付く歴史を学んだり、同じゼミの仲間とともに学びを深めたことは、私の大きな財産となりました。



中江藤樹の講堂での集合写真

有意義な2週間



英文学科 3年

杉原 亜衣梨

私は9月2日から17日にかけて行われた英語圏事情研修に参加し、英国のオックスフォードを訪れました。本研修には18名の学生が参加し、平日の午前には語学学校で様々な国の学生と英語を学び、午後はカレッジや博物館を訪れ、さらに土日にはロンドンに行くなど非常に充実したプログラムでした。

私は今回が初めての海外ということで、当初は様々な不安がありました。しかし日本とは異なる街並み、生活習慣、文化に触れ、画面越しでしか見たことがなかった憧れの海外の景色に圧倒され、不安が一瞬にして感動に変わりました。また英語を使わざるを得ない状況下におかれたことで、自分の

英語力の無さを痛感したり、授業に積極的に参加する海外の学生の姿を見て、自分の考えを持って表現することの大切さも実感したりしました。ロンドンでは、三浦先生の提案で、シェイクスピア・グローブ座で『マクベス』を観る好機に恵まれました。事前に加太先生から講義を受けたことによりたいへん有意義な観劇となりました。

2週間という短い時間ではありますが、今回得た学びは大きな糧となり、必ず将来に生きてくると思っています。しかしその陰には本研修を計画してくださった先生方をはじめとする多くの方々、また参加を応援してくれた両親の存在があり、様々な人に支えられて無事に帰国できたことに感謝しています。ありがとうございました。



ビッグ・ベンを背景に

旅をすることは 日常を顧みること



比較文化学科 4年

石田 万里奈

2022年8月31日から9月15日まで、友人に会い、文化や女性問題について学ぶためにイランに滞在しました。2週間の滞在で、宮殿やモスクをめぐって育まれた文化や歴史を堪能しつつ、友人の祖母との世代間交流もできました。

何よりも印象に残ったのは喜捨の心です。人々は、道中で出会う全盲やホームレスの方に惜しみなく寄付や介助をします。旅行前にネットで、イラン人と日本人の国民性が似ているという記事を見かけましたが、果たしてその通りなのか考えさせられました。

私が帰国便に乗った頃、ヒジャブの着用をめぐっ

て22歳のマフサ・アミニさんが道徳警察に殺害される事件が起きました。昨日まで見ていた街にはデモの炎、利用していた駅は混乱状態。友人も2週間大学に通えず、その報告を受けたのも、情報統制によって3週間も連絡が途絶えました。今なお女性たちの正義への戦いは続いています。1枚の布が政治利用され、女性の権利が軽視されることは他人事とは思えません。

イラン滞在は、自分の行動や意識を顧みる機会になりました。すべての出会いに感謝し、今後も他国の問題を自国の問題に落とし込んで考え、行動したいと思います。



カーシャーン・アブヤーネ村の売店

ザンビアの孤児院の 子どもたちから学んだこと



国際教育学科 3年

澤澤 瑞貴

NPO法人LES WORLDが主催する、ザンビアの孤児院で3週間子どもたちとミュージックビデオをつくるワークショップに参加した。私が訪れた孤児院には、ストリートチルドレンとして路上生活を送っている中で保護された子どもたちが生活していた。彼らは想像を絶する辛い過去を持っていた。当初は、あまりにも想像を超える過酷な人生で、どのように反応して良いのかわからず困惑したが、活動を通して徐々にお互い心を開いていった。辛い過去があるにもかかわらず、彼らは毎日とても輝かしい笑顔で、未来に向かって生きており、とてつもない熱量の夢と希望を

持っていた。皆元気がよく、パワフルで、いつも笑顔で、様々な優れた才能があり、本当にたくさんの楽しい思い出を共につくった。初めてのアフリカ渡航に不安もあったが、この3週間は一日一日、一瞬一瞬がとても充実して、今ではザンビアに家族のような大切な存在ができたと胸を張って言えるほどだ。

私はここで出会ったザンビアの子どもたちから、人間の生きる根源のようなものを見出した気がする。

世界には、学校に行きたくてもいけない子どもたちがいる一方で、学校に行けるのに勉強したくない子どもがいる。困難な環境の中でも希望を持ち続けるザンビアの子どもたちをみて、多くのことを考えさせられた。



ミュージックビデオ撮影本番の日！

実際に足を運んで学ぶ 津久井やまゆり園見学を通して



学校教育学科 1 年

西郷 洋音

私はこの夏、学校教育学科の堤英俊先生のゼミ(3・4 年) 企画の津久井やまゆり園の見学に参加させていただいた。堤先生の特別支援教育の授業の中で「行きたい人いたら一緒にどうぞ?」というお誘いに手を挙げさせていただいた形だ。

やまゆり園の事件は、相模原で生まれ育ち、当時小6だった私には身近で衝撃的であった。だから、大学生になり、特別支援教育に関心を持つようになった今こそ、改めて向き合うべき機会のように思った。

園は当時から建て替えられていて、施設全体は想

像以上に開放的だった。園内に地域に開放された公園があったり、部屋に鍵がなかったり。また生活の場である施設の中に働く場も設けられていて、自立した生活を促す心がけが印象に残った。

私は今回の見学を通して、現地に足を運び、色眼鏡を外して直接自分の目で見ることの大切さを実感した。長いようであつという間な大学生活。知りたいことや分からないことに全身を使って取り組み、一日一日を大切にしていきたい。



やまゆり園での集合写真です。

タイ・タマサート大学短期 研修プログラムから得たもの



地域社会学科 2 年

河瀬 孔太郎

約2週間のタマサート大学短期研修プログラムを通して、タマサート大学の学生さんをはじめ多くの方々と出会い文化を知るなかで、自分が持つ「イメージ」との違いというものを多く感じた。

学生さんとバディを組んで交流する中で、タイの政治に対する背景や国民観、歴史や音楽などカルチャーの話など、ネットだけでは知りえない生の話を聞くことができた。バンコクの街を歩いてみても、自分が想像した「東南アジア」のイメージとかけ離れたような発展した都市が広がり、JETRO 訪問や工場見学ではタイの発展を支える産業の数々の背景

や社会構造などを学ぶことができた。

全体を通して自分が持っていたイメージと大きく離れた「リアル」のタイを様々な側面から知ることができた一方、新たな文化と出会う中で自分が持っている価値観というものの狭さも改めて感じた。

この短期研修の良さは、自分が見ている景色をただ受け止めるだけではなく、何故そのような文化や社会ができたのか、タイに住み働く方々は何を考え、何を感じ社会に生きているのか、生の声を聞き知ることではないかと思う。

タマサート大学の学生さんをはじめ研修を支えてくださった多くの方々に感謝をするとともに、自分が2週間で見て感じた経験や知識を今後の大学生活でも活かしていきたいと考える。



リゾートでタマサート大学のバディと共にアクティビティや伝統的文化を体験する

現地調査から得る 唯一無二の経験



地域社会学科 3年

大友 天斗

環境社会学ゼミは8月31日から9月2日、三重県四日市市でゼミ合宿を実施しました。前期ゼミで四日市公害について事前学習を行いフィールドワークに臨んだため、文献やネットの資料では得られない情報や体験を効率よく吸収できたと感じています。1日目は「四日市公害と環境未来館」見学と公害被害地域を実際に歩き、塩浜小学校で語り部の生の声を聞く貴重な経験をしました。夕刻、地元で若者の就労支援に携わる北勢サポートへのヒアリングも今回、新たに加われました。2日目は四日市港管理組合による港湾機能のレクチャーを受けたの

ち、展望台よりコンビナートを含む四日市港を一望しました。午後は未来館解説員へのヒアリングです。3日目は四日市公害について教育実践を行う小学校教員から漫画『ソラノイト』を活用した授業を受けました。最後に振り返りの時間を設けることで、お世話になった関係者の皆様にフィードバックを行うこともできました。ゼミ合宿を通じ、同じ地域で活動する人がいたとしても、本人が「公害の教訓の継承」をする意義、その理想像は多様であることが強く印象に残りました。現地に行ったからこそ得た学びを今後の学生生活に生かしていきたいです。



語り部と共に公害被害地域を巡り
コンビナートを肌で感じる

自分の世界から飛び出して



国文学科 1年

車田 和可

私は夏季休業期間にカナダのリジャйна大学で、約3週間の短期語学研修に参加しました。初の海外渡航だったのですが、言語、気候、食文化や生活様式などすべてが目新しく映り、いかに自分が見てきた世界が狭かったのかを実感しました。学内やお店での英会話、リジャйнаの夏期における湿度の低さ、朝食と昼食が合わさったランチ等々、今まで生活してきた場所とは全くもって異なる環境での生活は驚きと学びに溢れていました。中でも、「会話の楽しさ」を知れたことは私にとって一番の収穫です。渡航前の私は、自分の英語の拙さ故に英語で話すことを躊躇っていました。しかし、プログラ

ムの一つだった農場見学で農場主さんにある質問をしてから、この考えは変わりました。流暢ではない私の言葉を農場主さんは丁寧に時間をかけて拾って、ときには表現を引き出してくださり、最後には聞きたかった事を教えてもらえました。自分の言葉が伝わったときの達成感、母語が異なる人と会話ができたことへの喜びは忘れることができません。カナダでは人の温かさ、優しさに助けられながら学ぶことができました。関わってくれた方々には感謝の気持ちでいっぱいです。



多国籍の語学研修のメンバー

韓国・延世大学 語学研修に参加して



比較文化学科 2年

鎌田 桃香

私は夏季休業期間に韓国の延世大学語学堂にて、3週間の語学研修プログラムに参加しました。平日は4時間の韓国語の授業を受け、午後や休日には有名な景福宮や明洞などの観光地から、地元の人に愛される漢江公園や市場など本当に色々なところへ行きました。また、この研修プログラムには文化体験もあったため、韓国料理やテコンドー、ハングルカリグラフィーなど独自の文化を実際に肌で体験する機会もあり、とても充実したプログラムでした。授業はすべて韓国語で受けました。語学堂は日本人が多く日本語で会話すること

も多くなってしまっていたのですが、韓国人の方と言語交流のできるサークルに参加し、韓国人や日本人留学生とたくさん韓国語を通して話した際に、自分の韓国語がまだまだだなと痛感したり、反対に自分の韓国語が相手に通じたり、言語の壁を越えて趣味の話などで意気投合できたときにはとても嬉しかったです。私は海外に行くこと自体がはじめての経験だったのですが、韓国と日本の食事や交通マナーなどの文化的な違いや、それでも変わらない現地の人の温かさを感じることができ、語学力も精神的にも成長し、最高の夏休みを過ごすことができました。



語学交換サークルで出会った仲間たちと

メルボルンの思い出



地域社会学科 3年

門田 健士郎

私は、オーストラリアのメルボルンで初めてのホームステイを経験した。海外での生活は不安でいっぱいだったが、実際は新しくできた友だちやホストファミリーとの日々を存分に味わいながら過ごすことができた。特に印象的だったのは友だちに連れて行ってもらった「グレートオーシャンロード」である。南極海に面した長い道を進みながら目の前に広がる景色を楽しんだ。昼食時にはタスマニア名物のホタテパイをたべた。日本ではあまりなじみのない食べ物だったもののカレーの風味とホタテは相性がよく、とてもおいしかった。私の大事な思い出となった。

メルボルンでの生活を振り返って思うことは、現

地の人々がとても親切であったことだ。道がわからなくて困っていた私に親切に道を案内してくれた配達員の男性や熱が出たときにいたわってくれた現地の友だちなど、多くの支えの中で生活を送ることができたことが幸せだった。今でも街のにぎわいやコーヒーの味わい、野生のカンガルー親子の仲睦まじい様子などをよく思い出す。メルボルンでの出来事一つひとつがかけがえのない私の宝物だ。



友だちで行ったグレートオーシャンロード

生徒と過ごした三週間



国文学科3年
伊藤 璃虹

私は八月下旬から三週間、母校の中学校で教育実習を行いました。三週間というわずかな期間で、計24回の授業、日々の生活記録のコメント返しや放課後の学校祭準備活動など盛りだくさんの日々を送っていましたが、この実習を端的に表すのならば「生徒とともに一緒にいた三週間」、そして「教員として勉強すべき事に気づいた実習」だったと感じます。

実習第一週目は不安と緊張の日々でした。朝の登校時間の挨拶から始まり、放課後の学校祭準備活動まで配属学級で生徒と共に過ごし、少しずつ生徒のことを知っていきました。授業見学から始まった教科の実習も毎時間が新しい気づきの連続で、現場の先生方から得た学びをこぼさないよう付箋にメモしながら臨んでいました。授業の進め方や板書の取り方、生徒の反応などを見て、夏休み中に用意していた指導案は大きく変更しなければ使いものにならないと実感し、生徒の実態に合わせ、変更を加えた指導案で第一回の授業に臨みました。

第二週目は、本格的に学級指導や授業に関わるようになりました。生徒の生活記録のコメント返しを担当するようになり、そこでもコミュニケーションをとることができました。「先生ー」と話しかけに来てくれる子、普段は積極的に来なくても生活記録に書いてくれる子、私の席の周りにそれとなく立って待ってくれる子、様々な生徒がいて、生徒との関係の築き方は十人十色だと実感しました。また、本格的に授業を組み立てるようになり、指導案を書くことの意義も徐々に会得することができました。国語という教科で養いたい力、その単元での目的を意識することが重要なのだと分か

りました。それは大学で主に学んできた学問としての国語とはまた別の視点であり、自分には足りなかった点だと気がつきました。

第三週目は、実習の集大成である研究授業と最後のお別れの週でした。それまでの日々で事前準備の大切さ・指導案の意義を学び、精一杯の準備で研究授業に臨むことができました。前日生徒に、「明日は研究授業があるのでよく寝て、元気に授業に臨んでください」と話すと、生活記録に「早く寝ました」と書く子や、その日の学級目標が「研究授業頑張ろう」に設定されていて、生徒の温かさを感じるとともに、三週間で確かに関係を築けたのだと感じ、嬉しく思いました。

今回の実習を通し、母校と言えど、自分が通っていたときは生徒の様子は全く違うことに気がつきました。「目の前の生徒」に向き合うこと、偏見や自分のものさしではかろうとしないことを教員になったときの軸に据えたいと強く思いました。残りの大学生活、学問ではなく教科としての国語の在り方についても学び、教員として現場に立った時は机に向き合う時間よりも子供に向き合う時間をとりたいと思います。最後になりますが、ご多忙の中、実習を受け入れ、ご指導いただいた校長先生をはじめとする先生方、短くても充実した実習になるようにとご配慮いただいた指導教諭の先生には深く感謝しております。



2年生国語「字のない葉書」の研究授業の様子

教師という夢に向けて



英文学科4年
今井 友輝

2023年5月、山形県立米沢興譲館高校にて3週間の教育実習をさせていただきました。この度の教育実習の目標として、「生徒を主体とした授業をつくること」、「生徒との信頼関係を育み、自信をもって授業をすること」の2つを掲げ、3週間の実習に挑みました。

母校である実習校の先生方にも恵まれ、高校に勤めておられる英語科8名の先生方全員の授業を見学する機会を頂きました。指導教官の先生の他にもさまざまなスタイルを持つ先生方の授業を見学できたことで、実習後半からの私自身の授業実践に先生方の技を少しばかり応用出来たように思います。さらには、授業見学の後には、授業の流れや活動の意図について先生にお聞きすることで、どのような要素を授業に入れ、どのような流れで授業を構成するかイメージが膨らみました。

実習で得た学びは大きく2つあります。1つ目は、生徒との関わり方についてです。実習前半は授業見学のみをさせていただいたので、直近の授業計画をする必要がない分、多くの時間を使って生徒との交流ができると考えていました。しかし実際は、始業してからあっという間に部活動の時間になり、一日は終えてしまいました。実習前から大学の授業で聞いてはいましたが、生徒との時間は、自分から作らないことには生まれないことを実感しました。その後の実習期間でも朝や昼休みなどの余裕はなくなるばかりで、生徒と会話をする機会を得ることに苦戦こそしましたが、「授業の後になんでも相談に来てください」と声をかけ始めたことによって、話しに来てくれた生徒を始め、徐々に多くの生徒と関係をつくっていくこ

とができました。実習生ではなく教師として現場に出る際には、多忙な環境により今回の実習以上に生徒との関係構築が難しくなります。どのように生徒に愛情を注ぐのか、生徒と十分に向き合えているかを常々振り返りながら、生徒とのかわりを大切にしたいと思います。

2つ目は、自身の授業についてです。授業実践の初めの壁は、生徒に活動の指示をすることでした。初めの数回の授業では多くの生徒が混乱していたり、私の想定することとは違うことをしていたりという様子が教室のいたるところで見つかりました。40人を前にして授業をするにあたり、簡潔で的確な指示をすることは非常に難しいことを痛感しました。指導教官からのご指摘を頂き、生徒の活動と教師の指示を明確に分けることや、ナンバリングをした指示によって改善していくことができました。最終日の研究授業では、一度出した指示を生徒から引き出し、再度全体へと共有できたことを先生方から評価いただきました。実習の中で浮き出た課題に対し一生懸命に対処したことで、教師見習いとして成長できたのだと思います。

ご多忙の中、指導していただいた先生方への感謝を忘れず、教師になるため修養を続けていきたいと思っています。



クラスとのお別れで感謝を述べている一面

実践と学びの連続



国際教育学科4年
遠山 美咲

6月26日から7月14日までの3週間、母校の中学校で教育実習を行いました。校長先生をはじめ、英語科の実習指導を親身に行ってくださいました指導教諭の先生やその他実習校の先生方には本当に感謝しています。新型コロナウイルスの影響が続き、学校では教師も生徒もマスクの着用や毎朝の体温測定、人と人とが密にならない環境づくりを徹底しており、私自身教師として生徒の安全を守らなければならないという意識が芽生えました。

実習期間中は、毎日が学びの連続で、常に充実した実習を行うことができました。はじめは、常に生徒から見られているという環境に慣れず、教師として職務を全うすることの大変さを痛感しました。生徒との会話や声かけが生徒の成長に繋がったり、教師としての信頼にも繋がることを学び、教師は「人柄」や「人間性」が問われると強く感じました。実習を重ねるごとに教師として「生徒のために何ができるか」ということを第一に考えることで、教師としてどう動けば良いか、そしてどのような授業を作るべきか少しずつ理解できるようになりました。

私が受け持ったクラスは中学3年生の2クラスでした。指導教諭からは「授業は実践あるのみ」として、英語の授業を行う機会を多く作ってください、PDCAサイクルを意識しながら授業実践をすることができました。大学で模擬授業を行う機会が何度かありましたが、50分間の授業を行うことは初めての経験でした。授業では、生徒が短期間で成長する姿を間近で見ることができ、とても嬉しく感じました。

授業作り（指導案の作成）では、毎日放課後

や寝る前に教材研究を行い、生徒にとって実りのある授業を行うために試行錯誤しました。指導教諭に授業のアドバイスをいただいたり、毎回の授業の終わりに生徒に感想を聞いたり、多くの人に支援していただきながら授業を良くしていくことができるよう心掛けました。生徒主体の授業を展開するために、英語による発問を事前にいくつか考えるようにしていましたが、発問の仕方によって生徒の反応がとて違ったため、生徒が興味を示すような内容、既習の文法事項の使用、単元で習う新出単語や文法の使用を上手く考えながら話さなければならぬと感じました。授業毎に指導案を作成しましたが、「生徒にできるようになってほしいこと」や、「生徒に伸ばしてほしい領域」などをより明確にできると、生徒の反応が良くなったように思います。教師として、生徒が積極的に発言した時や質問してくれた時はとても嬉しく、私自身もより生徒の学びを支援したいと思うようになりました。

今回の実習を通して、今まで当たり前になっていた先生方がいかに生徒を思ってくださっていたかを知るとともに、教師としてのやりがいを感じました。教師は、生徒のことを第一に考えられなければ務まらない責任ある職業です。これから、自信を持って教師になれるよう、実習での経験を忘れず、より一層学び続けていきたいです。



生徒たちからもらったメッセージブック

特別支援学校実習を終えて



学校教育学科4年

西尾 奏海

私は5月15日から2週間、地元である岐阜県の特別支援学校で教育実習を行った。担当学級は小学部2年2組。知的障害を主とする5人の学級だった。2週間という短い実習期間中は、朝の会の実践と国語の授業を担当させていただいた。また、運動会という行事もあり、積極的に児童たちと関わる時間が多かった。行事も重なり、先生方も多くの業務を抱えている中で、実習を受け入れてくださった実習校には深く感謝をしたい。この特別支援学校実習で学んだことは数えきれないほどだが、その中でも深く印象に残った学びは2つある。

1つ目は、児童の言動はどんな小さなことでも教員の中で共有する必要がある、そこから児童の実態が分かる、という事だ。実習1日目から先生方の様子を見てみると、どんなことでも教員同士で児童の様子を共有している様子が職員室内だけではなく、教室内や移動中などの様々な場所で見ることができた。例えば、朝にバスまで迎えに行った先生が「今日は〇〇くんは朝からいい表情しているから、落ち着いて過ごすことができそうだね」とか「今日は朝からあまり機嫌がよくないかな」といった様な事を様々な先生と話していた。私は先生方のそういった行動を真似て、「〇〇さんがこういう行動をしていたのですが、何か理由があるのですか」などと児童の気になった言動を積極的に細かく聞くことにした。すると、先生方は丁寧に答えてくれ、そこから児童の実態を詳しく知ることができ、それ以降の関わり方や授業の進め方などを考えることができた。

2つ目の学びは、授業内での様々な工夫を実際に見ることができたことだ。大学の講義で学ん

だことを実際の現場で見ることができ、それを研究授業内で自分自身が行うことで、より深い学びになったと思う。更にそれらの工夫は、特別支援学校だけではなく通常の小学校などでも取り入れやすいものが多かった。例えば、児童たちが予定の見通しがしやすくなるように授業の初めにカードを使って説明したり、できるだけ具体物を用意して、児童にとっての日常生活と授業が結びつくことを意図した工夫があったりと、本当に様々な工夫を2週間のうちにたくさん見ることができた。担当した国語の授業では、絵本の読み聞かせでも沢山の工夫を取り入れながら行った。予定カードの使用はもちろん、読み聞かせ中でも体を使って動いたり、声色を大きく変化させてみたりと様々に行うことができたが、やはり授業は難しい。授業が難しいことを再度実感できたことも大きな学びだ。

以上の2点が、特別支援学校実習で深く印象に残っている学びである。この実習で学んだことは必ず、教員になった時に必要になることである。将来の自分がどのような教員になっているかは分からないが、この実習で学んだことは自分にとって大きな成長になると思う。このような機会を与えてくれた実習校に再度感謝をしたいと思う。この経験を大切に、立派な教員になろうと感じた。



最終日に子ども達からもらった寄せ書き

教育実習を終えて



学校教育学科 3年

戸部 葵

私は、群馬県にある母校の小学校で3週間の教育実習を行いました。実習に行く前は、子どもたちに受け入れてもらえるのか、研究授業等で大きな失敗をしてしまうのではないかなどの不安がありました。しかし、実習を終えた今、そんな不安だった気持ちは忘れてしまうほど充実した楽しい毎日を送ることができて感じています。そして、教師を目指す気持ちが一層強まっていった実習になりました。

私が担当したクラスは5年2組でした。初めは緊張しており、どう話しかけて良いかわかりませんでしたが、朝登校してきたときの「おはようございます」という元気な挨拶や、緊張しながらも話しかけようとしてくれた子どもたちの姿を見て、自分も積極的に頑張ろうと感じました。そこで、私はまずクラスの子どもの顔と名前を覚えました。やはりただ話すよりも、名前を呼ばれると嬉しかったり、自分に興味を持ってもらえていると感じたりするのではないかと考えました。実習の事前説明でも、何よりも子どもとの信頼関係が大切だということを教わっていました。実際、名前をいち早く覚えてコミュニケーションを積極的に取っていたことは、子どもとの信頼関係を築くのに役立ったと思います。

実習では、大学で学んできた知識と結びつくような経験に加えて、現場でなければ得られない学びが数多くありました。特に感じたのは、授業をスムーズに進行するには入念な教材研究が大切だということです。授業を行う際、目当ての達成を目指しつつも、授業が教師からの押し付けに

なってはならず、だからと言ってあらぬ方向に子どもたちの意見が飛び交ってしまっては授業が成り立ちません。さらに、想定外の発言が生まれたり、逆に反応が全くなかったりすることもあります。私が授業を行った際も、想定していたほど子どもたちの考えが深まっていかなかった場面がありました。実習校の指導担当の先生からは、そうした状況を改善するためには、想定できるところまではしっかり想定して発問を考えておき、想定外のことに對しても臨機応変に対応できるよう教材研究を十分にして、教師が教材を良く理解しておくことが重要だと助言して頂きました。幸いにも、その時は隣のクラスで同じ授業を行う機会があり、改善して授業を実施することができました。

私自身が小学生として過ごした約10年前に、小学校の楽しさに気づかせてくれた先生方や友だち、今回の実習を受け入れてくださった母校の先生方、最終日にはお楽しみ会を開いてくれて、元気いっぱい私のことを「先生」と呼んでくれた子どもたち。この実習を終えて、自分に関わってくれたすべての人に感謝の気持ちでいっぱいであると共に、母校において貴重な経験ができたこと、多くの人と関わったことを嬉しく思います。夢を与えてくれた母校に恩返しができるよう、教員採用試験に向けて、そしてその先の未来に向けて、これからも邁進していきたいと思っています。



お楽しみ会の様子

生徒たちとお揃いの青い半被



地域社会学科 4 年

花城 康成

私は令和5年6月5日から16日までの2週間、母校である沖縄県の高校にて教育実習を行い、日本史と第3学年のクラス担任を担当させていただいた。実習が始まる前はかつて経験したことがないほどの不安と緊張に押しつぶされそうになる日々だった。実習を終えた今、むしろ思い出されるのは生徒たちとの怒濤の日々である。

今回、教育実習に臨むにあたり大学の教職課程で学んできた理論が実際の学校現場ではどのようにして活かされるのか、またどこまで通用するのかといった部分を体感したいという思いがあった。生徒との関わりや、担当した日本史の授業を通して、理論と実践の繋がりを強く感じる事が出来た。ここでは、私がこの2週間の教育実習を通して学んだことや経験したこと、感じたことを生徒対応と授業実践の2点からお話したい。

生徒対応に関しては、前述の教育理論の活用という観点から、生徒たちには自分から積極的に話しかけ関係構築をはかり、顔と名前をいち早く覚えてクラス全員とコミュニケーションを取るような心がけた。それにより、短い期間ながらも生徒の進路の悩みや学校生活についてたくさん話す事が出来、少なからず生徒との信頼関係の構築を図れたという手ごたえを感じた。また、2週目に学園祭があったことも生徒と関わりをもつさらなる大きな要因となった。担当した3年5組では、教室を使って夏祭りをモチーフにした縁日を行った。縁日や学園祭準備における様々な作業を共に行うことを通してクラスの団結や生徒一人一人の頑張りに気づくことが出来、また学校行事を通して生徒が成長する姿を間近で実感出来たことはこの教育実習の大きな財産となった。縁日の衣装とし

てクラスの男子生徒たちが着るお揃いの青い半被を、教育実習生である私の分も用意してくれていた素敵なサプライズがとても嬉しかった。

授業実践については、指導案などを含めて実習前に徹底して準備を行い臨んだものの、実際に教壇に立ってみると全く上手くいかず、最初は授業中に頭が真っ白になってしまうことが何度かあった。しかし、教科担当の先生のご指導のもと、改善点を修正してすぐ次の授業に活かすことや、生徒の反応を見て教材を変えてみたり指導案を工夫してみたりといった地道な作業を通して徐々に授業を作り上げていき、研究授業では自分が納得のいく授業が出来た。一方で、生徒の主体性を引き出すような発問や授業の軸となる問いの立て方に関しては、まだまだ改善の余地があると感じたため、ライフワークとして取り組みたい。

教育実習では、教科担当の先生をはじめ、様々な先生方からご指導いただき、多くの方々にお世話になった。教職課程の最終関門である教育実習を無事終え、教員として働く上での過酷さや楽しさを体験することが出来た。この貴重な経験を忘れず、教員を目指してこれからも努力を続けていきたい。



生徒達から贈られた色紙

短歌は人の体温にいちばん近い詩

開催 6月28日（水）

講演者 三枝昂之氏（歌人、山梨県立文学館館長）



講演会を伺って

国文学科教授 古川 裕佳

私が文学部の学生で、短歌が「現代」性を強く打ち出していたところに、三枝昂之という批評家が活躍していたことを覚えている。大学院に進学して近代短歌史の研究書を開くと、研究者としての三枝昂之の名前があった。創作者・研究者・批評家としてのそれぞれの仕事に出会い、〈文学〉とは全てを総合する営みなのだと思います。ご講演当日、三枝先生はこの講師紹介を受けて、ご自身の文業が、敗戦後の短歌不要論——旧弊な制度に縛られたものとして否定する——に正面から向き合い、短歌というジャンルをもう一度再構築するべく、創作・研究・批評の全てを一手に引き受ける形になったのだとお話し下さった。現代では短歌否定論などなかなか目にする事はない。しかし、困難な時代があり、それと闘いながら表現を勝ち取って来た歴史の証人としてのお話には啓発されるものがあつた。

講演会の感想

国文学科3年 守安 由佳莉

他人の生活や感情が、ほんの少しか自分の側にあるように感じられる。そういった短歌の魅力を知ることができた講演会だったように感じます。

今回の講演会では、樋口一葉から現代の若者短歌に至るまで、様々な側面の短歌のそれぞれに宿る「体温」について教えていただきました。与謝野晶子の情熱的な歌は火傷しそうなほど熱く、石川啄木の歌は平熱で自我を詠っている。このような視点から、私たちは短歌を鑑賞する際に誰かの体温を感じていること、またそれを自分の温度と照らし合わせていることを知ることができました。

講演会の後、SNSで短歌について調べてみると、プロとアマチュアの境を問わず多種多様な歌が流れてきました。お話の中にあったような、短歌とメディアの相性の良さを改めて感じました。その日をきっかけに短歌の鑑賞に親しむようになりましたが、若者の中での短歌の立ち位置を考えさせられる瞬間は多いです。

講演内でもお話があったように、若者短歌は日常語を生かした自身の折々を詠ったものが多く、日記帳のような役割を背負っているのだと感じます。それらの歌に描かれているのは、受け取る人にとっては全く知らない人の生活や感情のはずです。しかし、私たちは短歌から他人の日記帳を覗き見るようなときめきを受け取るだけでなく、その内容を自分の人生に引き寄せたくなるような共感を同時に覚えています。これが、短歌の持つ「体温」の力なののでしょうか。

SNSという画面上のコミュニケーションツールの中でも、誰かの体温を感じることができる。そのような要素を持つ短歌があふれていることの幸福さを噛みしめながら、より様々な視点で短歌について深めていきたいと思っています。

講師紹介

三枝昂之

1944年山梨県甲府市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、教員をしながら、同人誌『反措定』を立ちあげる。1973年、第1歌集『やさしき志士達の世界へ』（反措定出版局）を刊行。第2歌集『水の覇権』（沖積舎、1977年）で第22回現代歌人協会賞受賞。第一線の歌人として活躍しながら、日本近代短歌史について研究・評論活動が続ける。2005年『昭和短歌の精神史』（本阿弥書店）を刊行し、翌年やまなし文学賞を受賞した。ほかに遼空賞（2020年）、旭日小綬章（2021年）を受賞している。2013年より山梨県立文学館館長を務める。近年の著書に『聴音を聴く』（六花書林、2021年）がある。



英語スピーチプレゼンテーション

～ 英語ナレーター・アナウンサーが教える
英語スピーチの5つのエレメント ～

開催

6月16日 (金)

講演者

アレックス M 林氏



2023年6月16日(金)にラジオナビゲーターやナレーターとして活躍されている、アレックス M 林氏をお招きして、「英語スピーチの5つのエレメント」というテーマのもと、講演会を行った。英語のスピーチにおいて、聞き手に自分に興味を持ってもらい、自分の意思をはっきりと伝えるために重要な5つの要素について、講演していただいた。そして、参加者も実際に前に立ち、実演したり、会場の皆で声を出したりする、ワークショップ形式で進められた。氏のナレーターやラジオナビゲーター、スピーチコンテストのアドバイザー、高校時代のオバマ元大統領との経験から様々なアドバイスを頂いた。

今回、ご紹介いただいた5つの要素は Speed, Power, Octave, Intonation, Breath である。その中でも特に印象的だったのはオクターブの変化である。ただの自己紹介でも、オクターブの変化によって、与える印象がかなり異なり、面接などで聞き手の興味をひくことができると、氏は述べた。自分の声を意識することがとても重要なことであるそうだ。同じ文章でもオクターブをはじめとする5つのエレメントを意識することで意味合いが変わってくる。スピーチのデリバリーを上達させるためには、私たちが親たちからもらった声に磨きをかける必要がある。その具体的な方法としては自分が喋っている動画を撮影し、聞くことである。その中で、「新しい自分」にであう。それらを効果的に使い分けていくことが聞き手に意思を伝えるコツだそうである。氏は面接などの大切な日の数日前には、ボイスケアをし、万全の状態にしているそうである。

具体的な技術として、教えて頂いたのは Articulation というものである。意味としては (思想・感情の言葉による) 表現である。これはこういった技術かということ、テストなどで与えられる課題原稿には言葉を噛んでしまう部分があり、そこを見つけ、いかに噛まないようにするかを頭で構成する。さらに、気を抜かず、最後まで気持ちを込め、思いを伝える、というものである。この例として、数名の参加者がラジオジョッキーを体験した。声色の変化の仕方などのアドバイスを頂いた。

質疑応答では、数名の方からの質問に答えて頂いた。そこでも、質問者が歌を歌ってみるなどといったアクティビティを行った。実際に参加者も実演することで、これらは決して難しいものではなく、すぐにも実用できることが分かった。氏の実験の経験に基づく貴重な講演であり、参加者は終始笑顔に包まれていた。

(英文学科2年 飯倉 洸成)

講師紹介

アレックス M 林

バイリンガル大学/エンジェル投資家/国際キャリア形成についての講演活動/
TOIEC@ 全国公演活動
英国リーズ大学講師、ニュージーランドの大学

助教授、英国チチェスター大学大学院 External Examiner を務めた後、現在は常磐会学園大学教授、同志社大学兼任講師を務めるバイリンガル教員。かつて米国の演劇オーディションに合格後、Los Angelesでの舞台に立ったこともある。その最高に楽しいキャラクターと優しい口調と美声が買われ、FMラジオのエアナビゲーターやDJ、テレビのCMナレーターも担当するなど活躍の幅を広げている。



ラテンアメリカの民衆芸術

開催 7月19日(水)

講演者 本谷裕子氏、山越英嗣准教授



本講演会は、当学会が企画する講演会としては3年振りに完全対面の形式で行われた。また本講演会は、今年度に開催された国立民族学博物館開催の「ラテンアメリカでの民衆芸術」特別展を契機としたもので、講演者にはこの特別展に関係のある本学講師の山越英嗣先生と慶應義塾大学の本谷裕子先生をお呼びし、ラテンアメリカの民衆芸術についてお話し頂いた。

山越先生は導入として私たちにとって心理的・物理的距離のある「ラテンアメリカ」というフィールドについての定義を示し、このフィールドがスペイン・ポルトガルによる征服という共通の歴史、文化の混交、多様な自然を持つという特色を指摘した。また「アルテ・ポプラル」と呼ばれる民衆の日常、あるいは非日常の想像力から生み出された手工芸品が、現代において抵抗の手段になっていると指摘した。ハイアートと対照的に匿名性があり集合的な性質を持つ「アルテ・ポプラル」は現代ではストリートアートへと形を変え、先住民アイデンティティを持つ若いアーティストたちの社会への異議を表明する場として機能していることを説明した。

本谷先生は、文字通り歴史を織り込むことで自らのものにするラテンアメリカの先住民族の女性たちの装いの歴史と、現代におけるその装いの知的所有権について解説した。石造建造物などの男性の手によって築かれた硬いマヤ文明と対比して、女性の手によって築かれたやわらかい衣装文化は1000年以上の歴史を持つ。ウィピルなどの民族衣装は全てが女性たちによる

手織りの衣装であり、70以上もあるマヤ集落の中でそれぞれ独自の形・色・紋様・材料を持ち、生活基盤である巡回市場では、その独自の衣装が集落を代表する商標の役目も果たしたという。また織り手たちには長い歴史の中で外から来た異物を図案化して布で包むことで「非異物化」して自文化に取り込む試みがあり、ウィピルの紋様や材料の変遷を見ることは、現在の「マヤ」に至るまでの様々なエッセンスを紐解くことに他ならない。次に本谷先生はマヤの女性たちの集団的知的財産をめぐる織り手の運動について説明した。今尚自らの手で機織りを続けるグアテマラのマヤ系先住民の女性たちを主体としたグループは、装いの民主化に伴う諸問題、例えば国内外による図像の肖像権の侵害・盗用・剽窃、経済活動の妨害などを指摘し、先住民女性たちが紡ぎ上げてきた装い文化を世界遺産ではなく先住民の文化として保護されるような法的枠組みを求めて活動していると紹介した。ここでは先住民女性の織り手たちによる草の根レベルの連帯が知的財産権の獲得や女性を取り巻く諸問題へアクセスしていることが論じられた。

講演後の質疑応答で、本谷先生は丁寧に参加者の質問に答えて下さった。また会場には本谷先生にお持ち頂いた実際の織物が並べられ、参加者たちはそれを直接手に取ることができ、遠かったラテンアメリカへの距離の狭まる良い経験となった。

(比較文化学科4年 山本 多香良)

本谷裕子

慶應義塾大学法学部教授。

1996年義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了。2015年より現職。専門はラテンアメリカ研究、文化人類学、民族服飾学など。国立民族学博物館にて開催された特別展「メキシコ、ラテンアメリカの民衆芸術」ではメキシコの先住民集落の女性たちによる手刺繍作品と、グアテマラの先住民集落における手織物・コミュニティ復興のセクションを担当した。



山越英嗣

都留文科大学文学部比較文化学科准教授。

2015年、早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程修了。ストリートアートを通じて政治的な主張を行うメキシコの先住民アーティストたちや、カルフォニアに居住するオアハカ先住民移民コミュニティなどについて研究。著者に「21世紀のオアハカのストリートアーティストがつむぐ物語歌」(春風社)。



合唱団

都留文科大学合唱団は、1963年に創立され今年で60年を迎える混声合唱団です。顧問・常任指揮者の清水雅彦先生のご指導のもと、現在約50名の仲間とのびのび活動しています。毎年12月の第2日曜日（世界合唱の日）にはその年の集大成として定期演奏会を行っています。他にも、学校や社会福祉施設への訪問演奏会、市・県の合唱祭など、地域とともに歩み続け、様々な場所で「文大サウンド」をお届けしています。毎年参加している全日本合唱コンクールでは、今年も全国大会への切符を掴むことができました。ここ数

年、コロナによる我慢が続いていましたが、今年は解放の年で、毎日仲間と共に歌えることの喜びを感じています。いつも応援してくださる方々の声が私たちの力になっています。学年を越えて、全員の心と音がひとつになったとき、合唱の楽しさを心から感じるができます。こうして合唱ができるのも、いつも温かく見守ってくださる皆様のおかげです。これからも皆様の心に寄り添う合唱をお届けできるよう、精進してまいります。

都留文科大学合唱団団長 チットウッド キャンディス



女子バレーボール部

私たち、女子バレーボール部は現在部員20名で関東リーグ1部昇格を目指し、活動しています。今年の2部春季リーグで準優勝、秋季リーグでは3位という成績を収めることができました。春季には1部への入れ替え戦にも出場することができ、一人ひとり貴重な経験をすることができたと思います。この1年間監督、4年生を中心に日々練習に励んで参りました。私たちの目標である1部昇格には本年度は手が届きませんでしたが、下級生の大きな力も加わり、本学の強みである全員バレーをやり続けることができたと思います。

また、女子バレーボール部はバレーボールの技

術だけでなく、人との繋がりも大切に毎日の練習に取り組んでいます。コロナの影響で中々思うように活動できない時期もありましたが、私自身、本学女子バレーボール部に入部し4年間仲間と共に目標に向かって日々努力した時間はとても有意義であったと思います。

日頃より私たちを支えてくださる全ての方々に感謝すると共に、今まで続いてきた伝統を大切にしながら、たくさんの人に応援していただける部を目指し、これからも精進してまいります。

女子バレーボール部主将 関田 千尋



活動の紹介

剣道部

自分たち剣道部は、関東学生剣道連盟に所属し、関東学生選手権、優勝大会で勝ち上がり全日本学生選手権、優勝大会の出場を目指して日々稽古に励んでいます。今年も春季、夏季と大会があり、それに向けて昨年より強化錬成、合宿を繰り返し稽古に励んできました。強豪揃いの関東地区で思った成績を残せず全日本出場は叶いませんでしたがチームとしての課題、個々の課題と試合を経て課題が見つかりました。課題克服のため稽古に励み、今年8月に横浜で行われた関東甲信大大学体育大会では女子団体優勝、女子個人優勝、3

位の成績を残すことが出来ました。1人1人が毎回の稽古で何かしら意識しながら稽古してきた結果だと思います。剣道部は決して部員数は多くはないですが集団の力より個々の力を確かなものにする事で他大学に負けないチームづくりを目指しています。少数精鋭で1人1人が考えながら「頭」で剣道をするということを大切にしながらこれからもさらにレベルアップを目指して精進してまいります。

剣道部主将 森田 惣一郎



私たち都留文科大学吹奏楽部は、現在約60名で活動しています。1969年に吹奏楽愛好会として発足した当部は50年以上の歴史があります。

9月10日に荏崎市で行われた西関東吹奏楽コンクールに出場し、金賞を受賞することができました。今年度に入ってから感染症による制限が緩和されたため、吹奏楽部の活動もより活発にできるようになりました。練習できる環境を与えてくださる大学職員の皆様や、いつもご指導くださる講師の方々、応援して下さる全ての皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

今年の大会曲には大変苦戦し、全員で悩みながらの練習が多かったように感じます。人の数だけ考えがあり、たまには衝突することもありましたが、全員で1つの音楽を作り上げていくことの喜びを改めて感じました。

今回の西関東大会金賞という成績は、創部以来4度目です。都留文科大学吹奏楽部が目指すホンモノの音楽を皆様にお届けできるよう、これからも精進してまいります。

吹奏楽部部长 近藤 杏莉



第51回定期演奏会
(昨年度のものです)



つる子どもまつり



首都圏都留市会 懇親会

吹奏楽部

第47回

鶴鷹祭

実施報告



6月24日、25日の2日間にわたり、4年ぶりに本学において「第47回鶴鷹祭（都留文科大学・高崎経済大学総合体育対抗戦）」が開催されました。コロナウイルスの影響で4年ぶりの開催ということもあり、過去のデータが上手く引き継げてない状態の中、企画・運営をやって参りました。

47回という鶴鷹祭の素晴らしい伝統を繋ぐため、コロナ以前のようなスポーツの熱さを取り戻すために「鶴鷹祭復活」をスローガンに掲げ全力で戦いました。

2日間にわたり両校の選手たちが接戦をくり広げた結果、9（都留）—10（高崎）と惜しくも本学は勝利を納めることはできず、高崎経済大学が5連覇を飾りました。

来年度は舞台を高崎経済大学に移しますが、本学の体育会部活動に所属する学生たちは、勝利を掴むため対抗戦に挑みます。来年度も熱い試合が繰り広げられることを期待します。

実行委員長からのコメント



鶴鷹祭実行委員長 柴田 陸

コロナ禍を経て、本年度の6月に伝統の「第47回鶴鷹祭」を開催することができました。しかし、開催にあたっては先輩方の経験やノウハウなどが引き継げていなかったことから、50年近くの歴史と伝統を誇る鶴鷹祭の“完全復活を！”というプレッシャーを感じながらも、手探りで企画・運営を進めていくこととなりました。当日は、同じ体育会に所属しながらも普段見ることができない他団体の競技を間近で観ることができ、スポーツの素晴らしさ・美しさ・力強さなどを感じることができました。またプレーだけではなく、両校の応援にも熱がこもり、第47回鶴鷹祭「完全復活」にふさわしい熱い戦いになったと思います。



11月2日(木)から4日(土)までの3日間にわたって、第68回桂川祭を開催しました。第68回桂川祭実行委員会では、「コロナによる制限がなくなり、今年は晴れやかに桂川祭を迎えられる」という喜びの気持ちを込めて、「晴」というテーマで企画、広報活動、運営を行いました。

1日目には巨大迷路企画、カラオケ大会～パフォーマンス部門～、ハーバリウム作り企画、フレーバーの選べるポップコーンの販売企画を、2日目には、移動型動物園、カラオケ大会～歌うま部門～、ストラックアウト企画、トッピングの選べるミニパフェの販売企画を、3日目には、井上苑子さんとオーイシマサヨシさんをお呼びした芸能人企画、ビンゴ企画、たる倒し&玉入れ企画、トッピングプリンの販売企画を開催しました。また、3日間を通して、スポーツ祭典、各学生団体による出店、各学生団体によるステージパフォーマンス、スタンプラリー企画を開催したほか、構内各地には手作りの装飾を施しました。1日目のバルーンリリースからはじまった第68回桂川祭は、晴天に恵まれ、多くの方々が足を運んでくださり、花火で晴れやかに幕を閉じました。皆様にとって心に残る3日間でありましたら幸いです。

実行委員長挨拶



桂川祭実行委員会
委員長 緑川 琴音

昨年度までは、新型コロナウイルス感染症により、オンラインでの桂川祭、制限を設けた桂川祭を開催していましたが、4年ぶりにコロナ禍以前の制限のない桂川祭を開催することができました。第68回桂川祭を開催するにあたり、多方面からご尽力を賜りました。無事に開催できたのも、ひとえにお力添えをいただいた多くの皆様のおかげです。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

2023年度 夏季オープンキャンパス実施報告

8月5日(土) および6日(日) に夏季オープンキャンパスを実施いたしました。実施内容は、大学概要説明・キャンパスライフやキャリアサポート紹介・キャンパスツアー・学食体験・VR体験・かき氷の無料サービス・学内スタンプラリー・そのほか各学科における学科説明や個別相談、学科企画と盛り沢山の内容でした。

高校1年生にはこれからの文理選択の参考にして頂くため、高校2年生にはより具体的な学科を検討しつつ本学の魅力を広く感じてもらうためにも、多様な参加プログラムを用意いたしました。特に本年度は学科企画を開催したことで、高校3年生については自らの進路についてより具体化で

きたのではないかと推察しております。

猛暑の中、8月5日は1287名、6日は1298名の、両日合わせて2585名のご参加を頂きました。高校3年生の割合は、5日が58%、6日が51%でした。年々、高校1年生や2年生の割合が増えてきているように感じます。今後も、本学の魅力をより丁寧にお知らせできるよう心がけてまいります。

アンケートの自由記述では、教職員・学生の丁寧な対応を評価頂ける記述が数多くありました。準備・運営にご尽力頂きました教職員・学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

広報委員長 吉岡 卓



第72回 関東甲信越大学体育大会



関東甲信越大学体育大会は、学生スポーツの健全な発達及び普及と関東近郊の国公立大学の親睦を図ることを目的としたスポーツ競技大会で、本学は平成16年度から参加しています。

近年、新型コロナウイルス感染症の影響により大会の開催自粛を余儀なくされておりましたが、昨年度、感染対策を講じたうえで3年ぶりに再開されました。本年5月に新型コロナウイルス感染症の取り扱いが緩和されたことに伴い、今年度の第72回大会は特に制限を設けずコロナ禍前の形で開催されました。

本学からは16団体192名の学生が13競技に参加し、神奈川県・千葉県の各会場にて熱戦を繰り広げました。

大会では、「陸上(男子)個人 5,000m 2位」「走高跳 1位」「陸上(女子)個人 三段跳 2位」「ソフトテニス(女子)団体戦・個人戦 優勝」「剣道(女子)団体戦・個人戦 優勝」「柔道(女子)個人戦 重量級 優勝」「空手道(男子・女子)組手競技 2位」「バレーボール(女子)準優勝」「テニス(女子)団体の部 優勝」など素晴らしい成績を収めました。



教職実践研究会



8月11日(金)～12日(土)、第3回教職実践研究会が開かれました。北は北海道や秋田、南は熊本(オンライン)と全国から、のべ120名の参加者を得ることが出来て、新棟 THMC から始まる、学び合いの輪を広げることが出来ました。

この研究会は①卒後10年程の初期のキャリア段階の現職教員が現場で抱える問題を交流して学び合う②そこで得た課題を本学のカリキュラム改善に活かす③在学生にとって教職現場の実態と、その中での先輩たちの生き方に学ぶ、そんな場となるよう企画されたものです。

1日目は、この春まで教職支援センターにいらした宮下聡先生の講演「憲法・子どもの権利条約が息づく教育と子どもの学び-勉強って何のためにするの...?という子どもの問いに向き合う-」から始まり、小学校低学年/小学校高学年/中学・高校/さまざまなニーズへの対応と、4科会に分かれての学び合いと全体交流でした。2日目は4つの分散会に分かれて、参加者が教職現場での喜

びや悩みを率直に語り合うものでした。

今年是在学生の参加も20名余に増え、教員採用試験2次を前に励まされる場にもなりました。参加者の声を幾つか紹介します。「教師はブラックと言われるけど、そうじゃない。確かに変えていかなければいけないことはあるけれど、教師の仕事は楽しい・素晴らしい、というメッセージをもらいました。励まされました。」「教師として生きるとは、子どもと共に生きること、子どもの世界をとものにすること、子どもの声(声にならない声にも)に寄り添い続けることなど、大切なことをあらためて感じました。」

子ども理解を大切にしている都留文科大学の学びのよさを確かめ合うとともに、在学中のフィールド研究から、卒後の教職支援交流会までの幅の広がりの中に、新しいつながりを見出すことのできた研究会となりました。

教職支援センター 泉 宣宏



成績優秀者表彰式



7月26日(水)に、昨年度(令和4年度)の学業において特に優秀な成績を修めた学生の功績を称える「成績優秀者表彰式」が行われました。

学科・学年ごとに成績最優秀者及び成績優秀者を選考し、国文学科15名、英文学科15名、比較文化学科15名、国際教育学科6名、学校教育学科15名、地域社会学科15名の計81名の学生が表彰されました。式典では、加藤学長から表彰状が授与され、お祝いの言葉をいただきました。

また、表彰された学生には、平成26年度より創設された「成績優秀者奨学金」が給付されました。

前期終了者卒業式

9月21日(木)、本部棟3階大会議室において、令和5年度前期終了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は10名の学部卒業者のうち、4名が出席しました。当日は、担当教員をはじめ多くの教員が見守るなか、加藤敦子学長より一人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。



監事任命式

8月30日(水)、都留市役所において、監事任命式が執り行われ、堀内富久市長から再任された宮本和之様、新任された田邊護様に任命書が手渡されました。任期は、令和8事業年度の財務諸表承認日までとなります。どうぞよろしくお願いいたします。

市民公開講座

「佐野夢加親子かけっこ教室」
「英語であそぼう！」

7月23日(日)に、体育館において、ロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加特任講師による、市内小学生低学年とその保護者を対象とした「佐野夢加親子かけっこ教室」を開催しました。スキップやスタート練習、マーク走などを通して、走りの向上につなげるとともに、走ることの楽しさを学びました。親子14組で30名の参加となり、親子が触れ合う時間となりました。「走り方をいろいろ知ることができ良かった」、「負けて悔しかっ

た。また勝負したい」など、走りに対しての感想が多く寄せられました。

7月29日(土)には、THMC 6404・6405教室において、学校教育学科 上原明子教授による、市内小学生を対象とした「英語であそぼう！」が開催され、英語を使った「ゲーム」や「クイズ」などを行いました。15名の参加者は低学年と高学年で2教室に分かれ、それぞれのレベルに合った内容で、英語について楽しく学ぶことができました。



子ども公開講座

「陶芸教室」
「人工知能(AI)を使って
ポスターを作ろう！」
「光の不思議 万華鏡やブラック・
ウォールに挑戦しよう」



地域交流研究センターと都留市教育委員会「放課後子ども教室」事業の共催となる「子ども公開

講座」を7月から8月にかけて開催しました。

7月29日(土)には、美術研究棟において、学校教育学科 山本直紀特任教授、青木宏希特任教授による、小学生4～6年生を対象とした「陶芸教室」が開催され、12名が参加しました。板状にした粘土を使って、お皿やカップなど思い思いの形に制作し、施釉、焼成して仕上げました。完成品は、地域交流研究センターで作品展として展示し、自ら考え工夫しながら作り上げた様々な作品を公開しました。

現職教員教育講座

地域交流研究センターでは、7月31日(月)にTHMC6202 教室において、「現職教員教育講座」を開催しました。本講座は、山梨県総合教育センターの中堅教諭等資質向上研修の選択講座として同センターと共催で開催しています。県内の小中学校・高校・支援学校から延べ76名の現職教員の方々が受講されました。

講座は午前・午後の2部に分かれており、午前の部に教職支援センター 泉 宜宏 特任教授が「道

徳性の涵養」について、午後の部に学校教育学科 山本 剛 特任教授が「教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用」についてをそれぞれ担当され講義が行われました。

参加者からは「様々な資料を使って教材のとらえ方のお話をいただき、自分の授業を振り返る場となりました」、「具体的な手立てや対応の仕方も教えていただきとても参考になりました」など、たくさんの意見が寄せられました。



8月10日(木)には、THMC 6403 教室において、国文学科 野中潤教授による、小学生4～6年生を対象とした「人工知能(AI)を使ってポスターを作ろう!」が開催され、画像生成AIを使って、誰も見たことがないような面白いポスターを作りました。参加した12名の児童達が作成したポスターには、ロイロノートスクールの録音機能でナレーションを入れ、完成後はお互いに鑑賞しました。



8月16日(水)には、自然科学棟において、学校教育学科 三崎隆特任教授による、小学生2～4年生を対象とした「光の不思議 万華鏡やブラック・ウォールに挑戦しよう」が開催され、15名が参加しました。万華鏡や偏光板を用いた簡単な物理実験を行い、普段、何気なく見たり感じたりしている光の不思議さに触れることができました。

編集後記

比文 30 周年に際して

比較文化学科 上野 貴彦



甲州街道から日連大橋を望む（執筆者撮影）

今年度（2023 年度）で、比較文化学科は創立 30 周年を迎える。それにあわせて学科では、記念論集『共生と記憶の比較文化論』とシンポジウムを準備中である。着任 2 年目でまだ右も左も分からない私ではあるが、「急速に国際化が進行するなかで、複眼的に現代世界の動きを見定め、異文化や『他者』を理解して、人権に敏感で、新しい社会構築に貢献できるような語学力のある」人づくりをめざす本学科の歩んできた 30 年間に、思いを巡らせないわけにはいかない（カッコ内は学科 10 周年記念論集『記憶の比較文化論』より）。

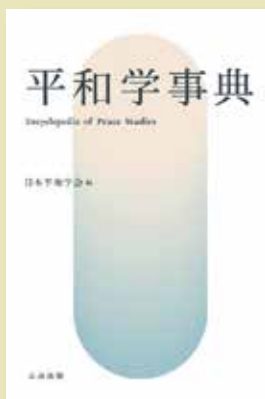
1990 年の入管法改正、ユーゴスラヴィア紛争（1991-2001 年）、ルワンダ虐殺（1994 年）、北アイルランド紛争の和平合意（1998 年）…。「相互理解」や「共生」、「平和の創出」の本質を公立大学の立ち位置から問う本学科のスタート地点は、冷戦体制崩壊などを契機とするグローバルな社会変動と、長期不況のまだ入口にあった日本における「多様な世界」への関心の民主化の結節点でもあったのではないかと想像する。それを一過性のブームに留めず、学生と教員がともに、

世界中にアンテナを張りつづけてきた 30 年間の知的蓄積が都留にはある。それは、日本各地での住民の人口減少と多様化の同時進行や、ウクライナをはじめ世界各地で続く戦争と暴力といった今日の課題を、歴史的経験と関連付け、比較しながら考えるうえで役立つのではないかとも思う。

コロナ禍で落ち込んだ、「ここではない、どこか」への人々の関心は少しずつ回復している。しかし、地域研究には持続してやっと見えてくるものが沢山あることを、自らの限られた調査経験のなかですら痛感させられることが多い。身の回りにある世界各地との繋がりを見落としがちな日常に、少し異なる切り口をもたらすこと。きっとそこに「比文の本分」があると信じて、研究・教育に取り組みたい。

ぶんだい堂

平和学事典



日本平和学会（編）
2023 年 6 月 発行
丸善出版

◇伊香 俊哉
比較文化学科 教授

13 新科目「公共」「公共の扉」 13 主題の授業事例集



東京都高等学校「倫理」「公共」
研究会（編著）
2023 年 8 月 発行
清水書院

◇西尾 理
地域社会学科 教授

源氏物語を読むための 25 章



河添房江・松本大（編）
2023 年 10 月 発行
武蔵野書院

◇長瀬 由美
国文学科 教授